

用もこれまで禁じられていたのである。1979年冬、アンダルシアの地においても同様の体験をした。セビリアではセビリアへの、調査地域であったシュラ・モレナ山中の山村ではその山村への帰属意識を人々は口にした。Regionalismo, Provincialismo, Parochialismo と空間スケールの相違によりいろいろ呼ばれてはいるが、その根底にあるのは、スペイン人の小さな祖国 patria chica に対する帰属意識の伝統的強さであることはしばしば指摘されている。特定の地域に対する帰属意識というのは何もスペイン人へのみかぎられたことではない。おそらく誰でも経験していることであろう。問題は小さな祖国という形容詞「小さな」ということと「国」という認識である。19世紀後半以降中央集権的国家体制の形成期に Regionalismo が昂揚したことが証明するように、Regionalismo はひとつには地方分権的な地域ご

の自治に基づく政治体制樹立の運動としてあらわれている。

スペインの「地域主義」そのものについては、その運動の担い手の社会的性格をはじめ問題がないわけではない。しかし、ユートピア的ではあるが、一つの空間組織のあり方を示すものとして関心と呼ぶ。根底においてアナキズムの影響を強くうけている。Myrna Margulies Breitbart (Anarchis&Decentralism in Rural Spain, 1936—1939, Antipode Vol 10, No. 3, Vol. 11, No. 1 1979) が明らかにしたようなアナキズムの空間組織原理とどのようにかわるのか興味のあるところである。

また運動が形成されていく過程での集団形成は領域 territory 形成とともに地域形成の問題ともかかわってくる。学際的研究視角が基本であるとはいえ、地理学的な研究テーマの設定を我々としては考える必要があらう。

## 最近の地震・火山の話題

### 諏訪 彰

関東大震災60周年の昨1983年は、久しぶりに、全国的に地震・火山活動がかなり活発であった。そのうえ、メキシコのエルチチョン火山の前年3～4月の大爆發で成層圏にまで吹き上げられた火山灰雲(おもにエアロゾル)による世界的な気候異変が懸念されたり、富士山大爆發・東京大地震発生などの非科学的なデマも流布されたりして、誠に騒々しかった。お陰で、私も、実にあわたしなく東奔西走させられた。

どこかの気象官署が震度4(落下物等で被害が出やすい)以上になった地震は26回もあった。5月26日の日本海中部地震(M7.7)は死者104人(地震動4人、津波100人)、傷者163人、8月8日の神奈川・山梨県境の地震(M6.0)は死者1人、傷者8人をだし、他の4地震も傷者をだした。全国でも、地震による死者は、1978年の宮城県沖地震(死者28人)以来のことである。3ケタ以上の死者がでたのは1965年のチリ地震津波(死者142人)以来のことであり、更に、日本とその周辺で起きた地震では、1948年の福井地震(死者3,895人)以来、約35年ぶりであった。

また、この年には、諏訪之瀬島・桜島・新潟焼山・草津白根山・浅間山・三宅島の6火山が噴火し、他の6火山も火山性異常現象(地震群発、噴気温・地温上昇、地盤隆起、海水面変色など)が認められ、特に、桜島と三宅島では、惨害を生じた。1955年秋からの桜島南岳の一

連の噴火活動は、1983年にも毎月爆發を反復し、年間413回を算した(累計4,329回)。過去に年間爆發回数が400台になったのは、1960年の414回だけである。10月3～4日におきた、三宅島の21年ぶりの噴火は、島の南西側での割れ目噴火であった。溶岩流出やマグマ水蒸気爆發で、火山噴出物総量は約1,200万 $m^3$ に達し、ことに溶岩流は住宅約400戸と小・中学校などを襲い、埋没・焼失させた。

三宅島測候所の地震計が噴火前兆の火山性地震を記録し始めたのは、噴火開始前1時間半足らずであったが、大噴火にもかかわらず、死傷者は皆無であった。噴火開始が昼間だったことも幸いであったが、元来、同島民達は火山活動に対する防災意識が強い上に、8月末に総合避難訓練がなされた直後だったのである。さすがは活火山島民で、危急の場合にも互助連帯の精神を貫き、防災の実をあげたのであった。

12月下旬、その三宅島が、突然わき上がった米空母艦載機の夜間発着訓練基地受け入れ問題で大騒ぎになった。噴火災害からの復興を急ぎ、離島の過疎化食い止めをはかろうとする村議会が、基地受け入れを含みとした、大型ジェット機が離着陸できる官民共同の新空港の建設を国に求める意見書を、隠密的に多数決で採決し、政府や東京都へ急ぎょ陳情した。それを後で知った一般島民達が、村議会の独走に猛反発したのである。

基地受け入れ推進派は、「YS-11型機の製造は中止された。現存の三宅空港はジェット機には小さすぎるので、数年後には空路が途絶え、島の主産業の観光事業は大打撃を受け、過疎防止の将来はない。」と焦る。反対派は、「訓練による騒音公害が予想され、自然と静けさが売り物の島の観光事業にも大いに悪影響があらう。該基地がよその各地で拒否されるのも、さまざまなマイナスがあるために違いない。」と主張する。

過去33年間もこの活火山島に取り組み、かかりつけの医者と思者のような間柄で、推進派とも、反対派とも親しい私は、火山対策に端を発したトラブルで島民達が真っ二つに割れて抗争するのは、遺憾千万と言うほかはない。お互いに虚心坦懐に話し合い、島の明るい未来を切り開く方策をとりまとめてほしいものである。

1951年6月、私は三宅島から“往診”を頼まれて初渡島し、島民達をおびえさせた諸現象が、噴火の前兆ではないことを解明した。しかし、将来に備え、常時火山観測体制の創設に微力を尽すことを誓うと共に、島民達も郷土の火山について知識を養い、防災意識を高めていくように要望し、それにも喜んで力添えしたいと訴えた。

以後、1962、83両年の大噴火の調査を含めて約20回渡島したが、島内での普及講演回数は30回近い。1951年の現地調査に協力してくれた高校生を、翌年、東京へ就職・進学させたが、その人は立派な地球物理学者となり、1983年の三宅島噴火の観測研究でも活躍した。また、1957年に常時火山観測を三宅島測候所の業務に加え、1963年度に現状のような観測体制に再整備したのであった。

今後、三宅島の常時火山観測体制は一段と充実・強化されるべきあらう。しかし、その場合、海に囲まれた島ならではの種々の難点があり、例えば、震動観測は波やうねりに邪魔されやすい。気象庁が常時観測中の17火山中で、浅間山等の8火山では5000倍で実施しているが、三宅島では1000倍にしている。基地の受け入れは、人工的にこの条件を悪化させるであろう。1953年、米軍が浅間山を演習地にしようとしたが、精密火山観測が致命的に害されるとして、強く反対され、遂に断念してしまった。また、客観的にみて、三宅島にはYS-11型機程度がふさわしく、それが使えなくなったら、例えばBAe-146型機(英国)などを輸入すればよいであろう。

(元気象庁)

## 校歌と筑波山

朝倉 隆太郎

小中学生時代に歌った校歌は、年老いても折りにふれ口ずさみ、故郷の風光、恩師の教え、友人の誰彼が思い出される。その歌詞には郷土の山や川や海が歌いこまれ、それらの自然を媒介として人生いかに生きるべきかを子どもたちに無意識のうちに教えているのが校歌である。

紫煙る男体の 山に夕陽の沈むとき 躍る吾等の双腕  
(もろうで)に 不拔の力溢れたり

これは、私が宇都宮で小学生時代をすごしたときの校歌の一節であるが、この歌詞を口ずさむと、日暮れまで校庭でサッカーのボールを蹴った思い出とともに、身体を鍛えること、健康に留意すべきことを自分に言いかけ、あの男体山のようにでありたいと思う。

筑波大学に勤務するようになって5年を経た。毎週見ている山であるが、筑波大学から見るその山容は、おだやかである。「横たわる仏に似たり筑波山」と一句作ったら、学生いわく、「仏」より「女」のほうがよいですよ。年齢の差か。

栃木・茨城・千葉3県の全中学校に依頼して校歌を収集した。その中から、筑波山を歌っている中学校の分布

は図のとおりである。筑波山は北北東の60°を除いて、

